

研究ノート

宮崎元立と英学（続）

はじめに

宮崎元立が幕末に市販された『英和對訳袖珍辭書』（初版、文久二年刊^①）の校正に携わったこと、そして幕府の教育機関の洋書調所から英学句読教授として招聘されたことなどから我国における英学の先駆者の一人であることを筆者は先の報告で明らかにした^②。

本稿では洋学関係書の出版にあたり幕府が行っていた検閲の記録である『開版見改元帳 一二』に宮崎元立の名前が出てくることをもとに元立の英学への取り組みをさらに掘り下げる。宮崎元立は蘭学から英学に軸を移した先駆者の一人だったと考える。

一 『開版見改元帳 一二』の概要

江戸時代には洋学関係の書籍を開版するには幕府の検閲を受けねばならなかった。その記録である『開版見改元帳 一二』が東京都立中央図書館特別文庫室にある。

表紙の中央に『開版見改元帳 一二』、その右に「自午年至寅年」、左に「元治元子季調」と書かれているので安政五年（西暦一八五八）年から文久三

三 好 彰

寅年（西暦一八六三）までの六ヶ年分の記録を元治元年（西暦一八六四）に清書したものである。

そして左端下段に「掌書局」と書かれている。天文方が行っていたこの検閲を安政三年からは新設の蕃書調所が担当するようになったので掌書局はその部局の名称であろう。

申請ベースで一六〇余件が出ているが差し戻されて申請をやり直したもののや大部な書籍を数回に分けて申請したものがあり書籍の件数は一一七件である。蘭学関係は医学や兵学を中心とした専門書であるが英学関係は初学者向けの書籍が大半である。

伊藤圭介、緒方洪庵、高嶋四郎太夫（秋帆）、福澤諭吉など錚々たる人々と肩を並べて宮崎元立が二件申請している。

二 宮崎元立の申請 その一

—— リンデルモリイ著『英吉利文範』

（イ）申請

宮崎元立が文久元年（西暦一八六一）三月五日付で次のように申請している。

一 英吉利文範

二編 全一冊

リンデルモリイ著

右此度翻刻蔵板仕度奉存候間御見改之儀宜敷奉願候 以上

酉三月五日

嶋加賀守家来 宮崎元立

これに対して書名の左側に朱書きで次のように二行にわたり判定結果が書かれている。

酉三月五日 改済

酉九月六日 納本

文久元年は酉年であり申請日に改済されているので申請書を元立が持参した日に決済されている。なお後述するが「酉九月六日 納本」は納本の予定日である。そして文末に朱で次のように書かれている。

右者二編ニ付初編間合候処未タ伺不差出趣二候³

二編を申請しているので初編をどうするかを糾されて「まだ申請しない」と答えている。

(口) 現存するリンデルモリイ著『英吉利文範』

早稲田大学がインターネットで公開している古典籍総合データベースに『英吉利文範』が入っている。それには初編と二編の二冊があり、写真1と写真2に示すように両方とも扉に『英吉利文範』と書かれている。しかし二編の表紙は『英吉利文範』だが初編の表紙はなぜか『英國文範』である。



写真1 『英吉利文範』初編の扉

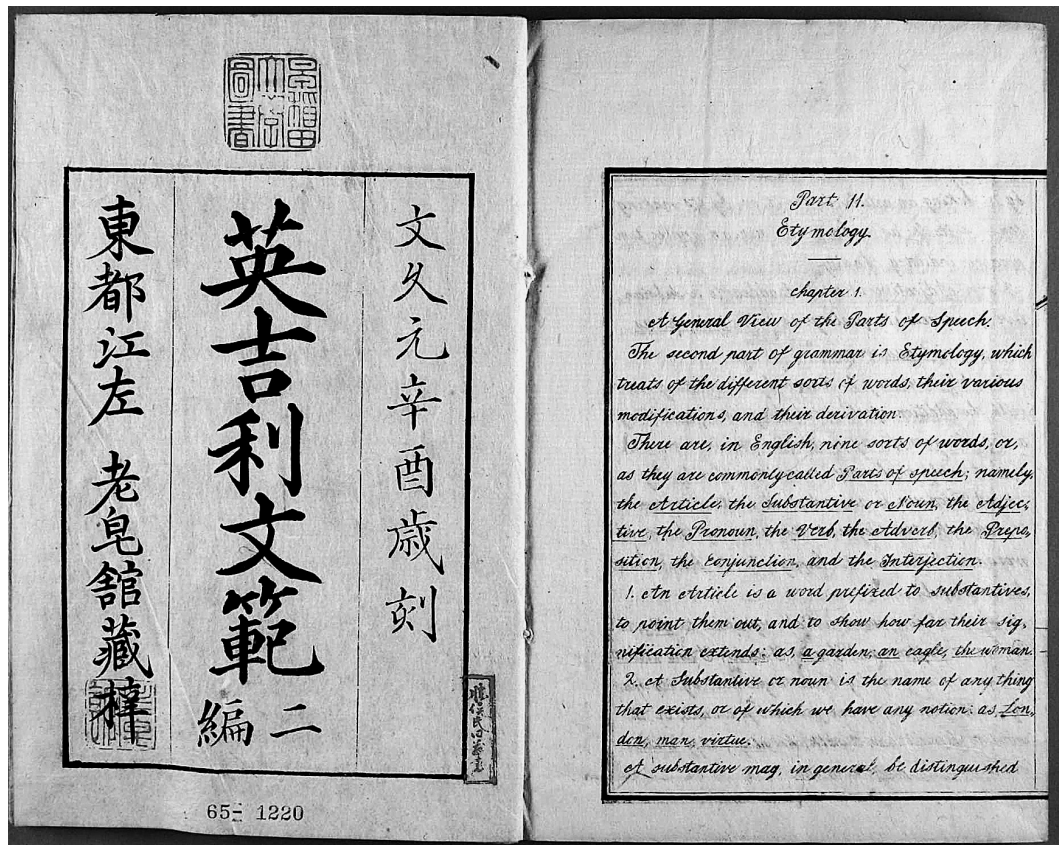


写真2 『英吉利文範』二編の扉

本文は両編ともに筆記体の手書きの英文であり、これを木版で刷り上げたのが Lindley Murray 著の英文法書を復刻した『英吉利文範』である。

Lindley Murray を元立はリンデルモリイと読んだ。初編より先行させた二編が文久元年に復刻され、初編の復刻は五年後の慶応元年なので『開版見改元帳 二』の記事と符合する、よって宮崎元立の名前は出ていないものの元立が翻刻したものである。

(ハ) Lindley Murray の原書との関係

(a) 英文法書の構成

Lindley Murray (一七四五—一八二六) はアメリカのフィラデルフィアに生まれて弁護士で財を成したのち余生はイギリスに住んで英文法を研究した。Murray を以下では発音にそってマレーと書くが、その英文法書(初版は一七九五年刊)はアメリカのみならずイギリスでも高い評価を受け十九世紀後半まで改版を繰り返した。

さてマレーの英文法書は次の四部構成である。なお(一)内は現代日本での用語である。

PART I	ORTHOGRAPHY	(正書法)
PART II	ETYMOLOGY	(品詞論)
PART III	SYNTAX	(文章論)
PART IV	PROSODY	(韻律論)

このほか APPENDIX (附録) がある。

『英吉利文範』の初編は PART III SYNTAX、そして二編は PART II

ETYMOLOGYを復刻したものである。なお『英吉利文範』二編の本文は一九三ページで、初編は二二二ページである。

元立は読者としてORTHOGRAPHYを学び終えた英学徒を想定してPART I (正書法)を省略し、専門的で難解なPART IV (韻律論)は一般の英学徒には不要と見なして残りの品詞論と文章論を復刻したと考えられる。

(b) 復刻方法

写真1、2の英文は見事な筆記体である。彫師が欧文の筆記体を巧に彫る技を身につけていたのが分かる。彫り慣れているので類書をこなした経験があるのだろう。

蘭学では α を α 、 β を β と書くが『英吉利文範』では通常の α と β である。しかし α は α を重ね書きした蘭学流であり、ハイフネーションも原書のハイフン(一)ではなく蘭学流の $\cdot$ を使っている。

原書がイタリック体とボールド体で書いている箇所には筆記体の地の文と区別するためにアンダーラインを引いている。

校正段階で気がついた誤りについては誤り箇所には○を付けて欄外に訂正内容を書いている。元立の草稿に間違いが無かったためだろう、訂正箇所は少ない。

(c) 原書の版

マレーの英文法書は毎年のように改版が繰り返されたため『英吉利文範』が原書のどの版に拠ったかを突き止める至難である。

『英吉利文範』の初編の原版はマレー英文法書の一八〇九年版でほぼ問

違いなからう。この版の特徴の一つは原文でSYNTAXの第一規則(RULE I)の第六行以降を次のように書き出していることである。

“The Normans, under which general term is comprehended the Danes, Norwegians, and Swedes, were accustomed to slaughter and rapine.”

この文は現在なら人種差別と糾弾されようが他の版では次のように異なる文になっている。

“There's two or three of us, who have seen the work.”

二編の原版は詰め切れていないがほぼ一八二九年版^⑤の復刻であると考えられる。原書との違いはいくつかのCHAPTERの最後に原書にある「Octavo Grammarの該当部を読め」という註を端折っている箇所があることだが元立が意図的に削ったのかもしれない。

ともかく両編で底本としたマレーの英文法書の版が異なっている。当初は初編と二編を一八〇九年版で作り上げたが、新版が出てきたのでこれに基づいてやりなおして二編(原文でPart II)を作り直し、後回しにした初編(原文のPart III)は結局改訂できなかった。なお原本のPart IIIを初編としPart IIを二編としたのは元立が日本人英学徒には品詞論より文章論が大切と考えたためであろうし、『英吉利文範』という書名にしたのも文章論を重んじたためと考えられる。

(二) 文久元年の宮崎元立

上述したように宮崎元立が『英吉利文範 二編』を申請したのは文久元年三月五日だが、同月二四日から元立は『英和対訳袖珍辭書』の校正に参加した。⁽²⁾

どうやら『英吉利文範 二編』を検閲した蕃書調所が元立の英語力を知って校正に参加することを強要したようである。事が急だったためだろうが小城藩には校正作業を開始した後の四月一八日になって連絡が届いている、これでは事後報告だが元立は小城藩江戸屋敷の判断のもとに校正作業を開始したのだろう。

三 宮崎元立の申請 その二

『民間格致問答』

(イ) 申請

宮崎元立の二番目の申請は次の通りである。

一 民間格致問答

全部六冊之内 一 二 三

三冊

右私師大庭雪斎翻訳仕候を此節開板之上

蔵本ニ仕度此段奉伺候 以上

戊三月二五日

鍋嶋加賀守家来 宮崎元立

『民間格致問答』⁽⁶⁾⁽⁷⁾は蘭書を邦訳したもので雪斎の代表作である。ここで

戊は文久二年である。書名の右側に朱で次のように書いてある。

戊五月二五日改済 丑五月六日全部六冊納本 尤四 五 六 三冊者子六月五日見改済

これによると三月二五日に申請し二ヵ月後の五月二五日に改済になっている。そして全六冊を改済の丑（慶応元年）年五月六日に納本するが、その内の四・五・六の三冊は子の年（嘉永五年）に検閲（見改）を済ませている。なお元治元年に清書されたこの資料に後年の丑年（慶応元年）に納入の記事があるので「納本」とは納本を約束した日である。

さて早稲田大学に大隈重信旧蔵の『民間格致問答』がありインターネットで写真が公開されている。それを写真3に掲げるが、それに「文久二年壬戌三月官許」と刻されている。『開版見改元帳 二』にあるように改斎が五月二五日ならば三月官許はフライングである。

しかし印刷所が官許の日付を間違うのは考えにくい。『開版見改元帳 二』を元治元年に清書する時に三月二五日を五月二五日と誤記したのである。そうなら申請した日に改斎となったわけで分かり易い。

なお元立の申請の次に三月二五日改斎の手塚律蔵の申請が出ている。他の年の記事も改斎日の順に書かれており改斎日が逆転して五月二五日の元立、三月二五日の律蔵の順に出ているので誤記の可能性が高い。

(ロ) 大庭雪斎

この申請に宮崎元立が蘭学者大庭雪斎を師と書いている。なお小城藩日記の慶応二年（西暦一八六六）四月十一日に「医師弟子名前差し出しの事」の記事があり「大庭雪斎殿弟子 相良柳逸」に続いて「右同人弟子 宮崎蘇庵」が出ている。蘇庵は元立の改名後の名前なので、この記事からも二



写真3 大隈重信旧蔵『民間格致問答』

人の師弟関係が確認できる。

『開版見改元帳 一二』に緒方洪庵の代表作である『扶氏経験遺訓』⁹⁾が出ているが、この本は洪庵が翻訳し参校を雪斎が担当して安政四年に出版された。そのときに佐賀藩弘道館の教導だった雪斎から元立はこの本で蘭医学を学んだことだろう。

(八) 文久二年の宮崎元立

宮崎元立は文久二年四月一六日に佐賀藩医学校の好生館に入学した。⁸⁾『民間格致問答』の検閲の申請から三週間後である。

そして洋書調所は年末に元立を英学教授手伝並出役として招聘した。¹⁰⁾元立はマレーの英文法書を理解していた当時トップ級の英学者だったから、この招聘は当然のことと思える。元立にしてみれば家業の蘭医を取るか英学を取るかの選択を迫られたわけだが当然のように英学を取った。

四 宮崎元立に先行したマレーの英文法書への取り組み

宮崎元立が『英吉利文範』を上梓したのは文久元年であるが、それ以前にマレーの英文書の和訳が完成しており、また活字による復刻が開始されていたことを述べる。

(イ) 渋川敬直らによる『英文鑑』

宮崎元立より前にマレーの英文法書が『英文鑑』と題されて和訳されていた。それは天保十一年（西暦一八四〇）のことだから元立よりも二〇年も先んじている。天文方の渋川敬直（六蔵）が藤井質の協力を得てマレー

の英文法書のオランダ語訳本を日本語に重訳したが、オランダ語訳版は英語版の第二編と第三編、つまり品詞論と文章論を訳出したものであり元立の選択と同じである。

洪川らはマレー英文法書のオランダ語訳第二版で品詞論を訳し終えたところで、オランダ語訳の第三版¹³が入手できたようであり文章編は第三版によって訳し、そして訳し終えていた品詞論に第三版の改訂部分を詳細に盛り込んでいる。マレーの英文書を英語版で復刻した元立が、その二編（品詞論）と初編（本文の第三章、文章論）で原書の版を変えているのと似ている。入手できた最新版を用いるという意味では共通である。

『英文鑑』はわが国に於ける最初の英文法書である。三部が浄書されて、その内の二部が幕府に献上されたのみであり一般に流布しなかった。関係者の努力で刊行されたのは昭和三年であり、史的な復活であった¹⁵。

（口）木村嘉平による復刻版

鹿児島にある博物館の尚古集成館に国の重要文化財「木村嘉平関係資料」がある¹⁶。これは薩摩藩主・島津斉彬からマレーの英文法書のオランダ語訳版を復刻する命を安政元年（西暦一八五四）に受けた木版師の木村嘉平が造った活字とその工具類である。活字の完成は元治元年であり、十年にわたる大事業であった。

ちなみに原本のオランダ語版のマレーの英文法書第四版¹⁷も現存するが、木村が印刷した刊本は知られていない。

安政初年にマレーの英文法書が必要とした薩摩藩は英学の先行性を示している。そして六年後の文久元年に英文版で復刻した元立の英語力はその上を行くものである。

五 幕末期の英語界

宮崎元立がマレーの英文法書を理解したうえで文久元年三月五日に『英吉利文範』の復刻を意図して検閲の申請をした。元立はどこで英語を学んだのであろうか。元立の周辺の幕末の英語界を概観する。

（イ）宮崎元立の英語を学ぶ機会

元立が江戸へ向けて郷里の小城を出発したのは安政五年十一月三日である⁸が、佐賀藩が英学を開始したのは文久元年なので元立の英学開始は地元ではない¹⁸。当時、江戸なら英学を学ぶ機会があった。

蕃書調所はその一つであり安政五年五月二三日に「幕府令して陪臣の蕃書調所に就学するを許す」とした。これには「両文典句読相済」という条件がついていた¹⁹。両文典とはオランダ語のガランマチカ（文法論）とセインタキス（文章論）のことであるが、元立の師である大庭雪斎は安政三年にオランダ語の文法書を翻訳した『訳和蘭文語』²⁰を刊行していたので弟子だった元立が本書を学んでいたことは想像に難くない。つまり元立は入学の条件を満たしていた。

他の可能性は民間の洋学塾である。たとえば江戸に手塚律蔵の又新塾があったが、蘭学と英学をこなした手塚のもとから西周、津田仙などの語学の逸材が巣立った。

元立は綾部新五郎と安政五年一〇月一五日付で同時に江戸遊学を認められたが⁸、二人が小城を出発した日が違うので江戸の目的地は違ったと考えられる。そして新五郎は万延元年の遣米使節団に加わったが途中で脱走を

繰り返して帰国した直後に品川で禁足を命ぜられたという逸話の持ち主である。⁽²²⁾ もっとも国許に戻った万延元年二月二八日に藩主から褒美を受けたので脱走は個人プレーでなかったかもしれないし、備えがあつての海外志向ゆえ英語を学んでいたことが考えられる。新五郎は民間の洋学塾で元立は蕃書調所で英語を学んだという分担だったかもしれない。

なお新五郎は慶応二年二月一三日に長崎へ英語の稽古に出かけたが、明治になってから同郷の大隈重信に無心をしており英語の勉強の成果が活かせなかったようである。⁽²³⁾

(口) 蕃書調所の英語教育

蕃書調所の開設時点では洋学とは蘭学であつた。しかし幕府は万延元年(西暦一八六〇)八月に「従来の蘭語正科たりしを止めて英語を正科となす⁽²⁴⁾」と方針を改めた。

英語の教科書としてはオランダで刊行された教本をもとにし、この本からオランダ語で書かれた記事を取り去って蕃書調所が復刻した“Familiar Method”⁽²⁵⁾を先ず用いた。この本は英語の初学者が覚えるべき基礎的な英単語や簡易な英文を通して実践的に英語が身につくように作られている。本文が一〇ページ(静嘉堂蔵版による)の小冊子である。

英文法は万延元年に咸臨丸でアメリカを再訪した中浜万次郎が持ち帰った“The Elementary Catechism. ENGLISH GRAMMAR”を蕃書調所が『英吉利文典』の書名で復刻して教科書とした。つまり万延元年の英学徒は英語で書かれた二つの教科書で英語を学んだ。なお『英吉利文典』は掌に載る小冊子なので『木の葉辞典』と称されて多くの英学徒に愛用された。本文は六三ページ程度(版によって差がある)である。

『英吉利文典』は問答形式で英文法を学ぶようになっていた。その六番目のやり取りは次のようである。

Q. what are the divisions of grammar?

A. grammar is usually divided into four parts: orthography, etymology, syntax, and prosody.

この四つの分類(orthography, etymology, syntax, prosody)は上述したマレーの英文法書と同じである。これら四つを順に質疑応答形式で説き明かしていく。

ちなみにマレーの英文法書は書名にthe more advanced studentsのための本だと書いており、『木の葉辞典』で一通り英文法を学んだ日本の英学徒のためにマレーの英文法書を復刻して『英吉利文典』としたのは元立の良い判断だった。

(ハ) 幕末の洋書の市場の一端

写真1と写真2から『英吉利文範』を老皂館が出版したのが分かる。そして両編の奥付にあたるページに広告が写真4のように出ている。写真で見るとこの二冊の広告の内容は同じである。

この広告は元治甲子年(西暦一八六四)付であり「右之外 舶来新奇之書籍其外醫學所諸先生翻譯醫書并 開成所⁽²⁷⁾ 官版御書籍類月々刊行 希四方諸君子多被閱」と書かれているように老皂館が印刷したものほかに官が印刷した書籍も取扱っている。

このなかで『開版見改元帳 一二』に出ているのは、『地球説畧』、『聯邦志



写真4 老皂館發兌書目

畧、『西医畧論』、『内科新説』、『婦嬰新説』である。そして下段最左端の『英文範 上下 二冊』は『英吉利文範』で間違いあるまい。これ以外は官版であろう。

インターネットで公開されている「鍋島家文庫目録」に出ている老皂館発行の書籍も元立と何らかの関係があるかもしれない。

また『英文範 上下 二冊』の右に『英和辭書 大本 一冊』とあるのは他に類書がないから『英和對訳袖珍辭書』である。飛ぶように売れたと言われてきた本辭書だが出版から一年以上経った元治元年に老皂館が在庫を持っていたと受け取れる、新鮮な驚きである。

そして英文のまま復刻された『英吉利文範』を民間の出版社である老皂館が販売していることから、この本を受け入れる市場が形成されていた、つまり文久元年に英語で印刷された『英吉利文範』を待ち受けている英学

徒が少なからず居たわけだ。英語で英語を学んでいた万延元年の英学徒の姿が浮かんでくる。

木村の活字が完成したのは元治元年である、『英吉利文範』が市場に出ていたからオランダ語版のマレーの英文法書はもはや不要と判断されて刊行されなかったのだろう。

六 『英和對訳袖珍辭書』の邦訳語と宮崎元立

宮崎元立が著名な蘭学者である大庭雪斎のもとで蘭学と蘭医学を学んでおり、そしてマレーの英文法書を英語で読みこなせる力を持っていたことが分かった。これらの勉学の成果が元立が校正に参加した『英和對訳袖珍辭書』初版（文久二年刊）の医学関係の邦訳語に出ているかどうかを簡単に検証する。

杉田玄白は蘭語を日本語に訳す方法として従来から知られていた語を充てる翻訳、新たに語を作る義訳、そしてオランダ語の発音を訳語とする直訳の三つに分けたが、ここでは医学関係の邦訳語の直訳を取り出し、それがオランダ語によるものか英語によるものかを考察する。

対象となるのは以下の六語で総てである。英語の見出し語と直訳になっている邦訳を示めして検証するが、邦訳の中の小さなフォント部は邦訳に付けられている注釈であり、英語の見出し語に付いているsは名詞 (Substantive) の略号、adjは形容詞 (Adjective) の略号である。

(v) Catarrh, s. シヤンケン 聖京痼 傷冷毒ノ類

『英和對訳袖珍辭書』の底本である Picard 辭書は Catarrh に対してオラ

ンダ語訳 *zinking* を与えている。それに対応して『扶氏経験遺訓』に聖京^{シンキング}偏が出ており、幕末に刊行された蘭和辞書である『和蘭字彙』⁽²⁸⁾にシンキング病が出ている。

邦訳語のルビのシンキングはシンキングの間違いでともかくオランダ語の直訳である。

(g) Gouty, adj. 「トート」ヲ煩テ居ル

Picard 辞書は Gouty のオランダ語訳を *jichüg* としている。形容詞 Gouty は名詞 Gout の派生語でありゴートは英語の直訳である。

なおオランダ語では名詞と形容詞で綴りが同じであることが少なくないが、この場合もそうであり名詞の *jichüg* を『扶氏経験遺訓』は伊^イ倂^{ゲト}篤と訳し、『和蘭字彙』はイグトと訳している。ちなみにオランダ語の *g* は *g* と同音である。しかしガ行の音でないがガムやゴムというオランダからの外来語も江戸時代からガ行の音にしている。

(c) Hysteric, -terical, adj. 「コストリス」ノ病ノ名

Picard 辞書はオランダ語訳を *hysterisch* としている。『和蘭字彙』にこの語は出ていない。『扶氏経験遺訓』に歇^ヘ以^{イス}私^ス的^{テリ}里が出ている。ヒストリスはオランダ語訳 *hysterisch* の直訳である。

(p) Rheumatic, adj. 「ルーマチック」ノ病名通風ノ類

Picard 辞書はオランダ語訳を *jichüg* ~ *rhumatiek* としているが、*jichüg* は (b) で述べた。『和蘭字彙』に *rhumatiek* は出ているが、『扶氏経験遺訓』では^{レウマチ}痺麻質である。よってルーマチックは英語の直訳である。

(e) Rickety, adj. 「リケッツ」病ヲ患テ居ル

Rickety は名詞 Rickets の派生語であるが Picard 辞書は Rickets のオランダ語訳を *Engelsche ziekte* としている。このオランダ語訳は『和蘭字彙』には出ていない。『扶氏経験遺訓』は英吉利病と訳した上でオランダ語では *Engelsche ziekte* の直訳のエンゲルセシーキテンであると解説している。ともかくリケッツは英語 Rickets の直訳である。

(f) Rupture-wort, s. 「ルユプテウル」病ニ功アル薬草

Picard 辞書はオランダ語訳を *breukwortel* としている。ルユプテウルは英語 Rupture の直訳である。なお *breukwortel* は『和蘭字彙』にも『扶氏経験遺訓』にも見当たらない。

以上のことから六語の中の二語 (Catarrh に対する聖京偏と、Hysteric, -terical に対するコストリス) がオランダ語の直訳で残りの四語が英語の直訳である、両方が混在していることが何よりも雄弁に蘭学から英学への移行期であることを物語っている。元立を含めて『英和対訳袖珍辞書』の編纂に加わった人々が我国で英学を立ち上げたトップ・ランナーであるが、その心意気が英語からの邦訳に読み取れる⁽²⁹⁾。

紙面の関係で詳細は省くが、上記以外の医学や物理学関係の『英和対訳袖珍辞書』の邦訳語は『扶氏経験遺訓』、『民間格致問答』の邦訳語に惑わされていないように思える。

七 まとめ

文久元年に宮崎元立がマレーの英文法書を英語のまま復刻した『英吉利文範』を市販しており、その英語力が『英和対訳袖珍辞書』に活かされていると思える。そして洋書調所から英学教授手伝として招聘されたのも頷ける。

また元立の『英吉利文範』を受け入れるだけの市場が出来ていた文久元年前後の英学界は想像以上に高いレベルにあったと考えてよい。その先導者が宮崎元立であった。

末筆ながら貴重な写真を使わせていただいた早稲田大学図書館特別資料室に感謝の意を表する。

〔註〕

- (1) 堀達之助編『英和対訳袖珍辞書』初版、文久二年（西暦一八六二）刊
- (2) 三好彰「宮崎元立と英学」佐賀大学地域学歴史文化研究センター紀要第五号、二〇一一年
- (3) 『日本科学技術史大系一』（日本科学史会編、一九六四年）の資料2-4『開版見改元帳』として『開版見改元帳 二』が復刻されている。しかしこの文（右者二編…趣二候）などの一部が端折られている。
- (4) English grammar adapted to the different classes of learners, with an appendix containing Rules and Observations, for assisting the more advanced student to write with perspicuity and accuracy, by Lindley Murray; Printed for Benjamin Johnson, no. 299, & Johnson & Warner, No. 147, Market Street, New York, J. Bouvier, Printer 1809.
- (5) English grammar, adapted to the different classes of learners : with an appendix,

containing rules and observations for assisting the more advanced students to write with perspicuity and accuracy, by Lindley Murray; York: Wilson and Sons, London: Printed by T. Wilson for Longman, Rees, Orme, Brown, and Green : for Harvey and Darton, 1829.

- (6) ヨハンネス・ボイス著、大庭雪斎訳、大庭景利、安田雄平（現代語訳、『民間格致問答』幕末の自然科学入門書 現代語訳）、葦書房、一九九二）
- (7) 幸田正孝『民間格致問答』の著者ボイスと訳者大庭雪斎、津山工業高等専門学校校紀要、一九八三～一九八九
- (8) インターネットで公開されている『小城鍋島文庫日記目録』と、同日記の本文から洋学関係の記事を抜粋した資料『小城藩日記』にみる近世佐賀医学・洋学史料（前編／および／後編）（佐賀大学地域学歴史文化研究センター編）を多用した。日付で確認できるように配慮し、煩雑さを避けて本稿では小城藩日記と略称した。
- (9) 扶歌蘭度著・華傑満訳・緒方洪庵、緒方研堂訳・大庭雪斎 参校『扶氏経験遺訓』、秋田屋太右衛門、心斎橋通安堂寺町（大坂）、安政四年
- (10) 先報で宮崎元立と同時に洋書調所から英学教授手伝として招聘された田中晋が要請に応じて着任していたことが判明した。もう一人の碓井鐘三は依然不明であるが田中と碓井はともに水野大炊頭の家来、つまり紀州藩の支藩の新宮藩士である、宮崎元立は佐賀藩の支藩の小城藩士なので三人とも支藩の武士なのが興味深い。
- (11) 杉本つとむ（一九九三）、『英文鑑』資料と研究、ひつじ書房、一九九三
- (12) マレー英文法書のオランダ語訳第二版（一八二二年刊）を保有する図書館が見つからない。
- (13) Engelsche spraakkunst : bewerkt volgens de leervijze van Agron : ten dienste der scholen, en der geenen, die de Engelsche taal op een spoedige wijze grondig willen leeren / door Lindley Murray, 1829 オランダ王立図書館蔵
- (14) 徳富猪一郎『典籍清話』、民友社、一九三二
- (15) 洪川民子（一九二八）：洪川敬直訳『英文鑑』、一九二八
- (16) 西野嘉章編『歴史の文字：記載・活字・活版』、東京大学総合研究博物館、一九九六
- (17) Engelsche spraakkunst: bewerkt volgens de leervijze van Agron, ten dienste der

scholen, en dergenen, die de Engelsche taal, op eene spoedige wijze, grondig willen leeren. Lindsey Murray. Amsterdam : G.J.A. Beyerinck. 1846.

- (18) グリフィス著、松浦玲監修・村瀬寿代訳編『新訳考証 日本のフルベッキ』、洋学堂書店、二〇〇三
- (19) 『東京市史稿 市街篇』に「蕃所稽古之儀、此節万石以上以下陪臣之儀は、稽古差許相成候間、両文典句読相済、格別執心之者は、蕃所調所へ罷出稽古可致旨、仰渡す」とある。
- (20) 茂住實男、「開成所と英学教師 (2)」、拓殖大学論集、一九八五年
- (21) 大庭雪斎翻訳、秋田屋太右衛門『訳和蘭文語』、須原屋茂兵衛ほか共同刊行、一八五五～一八五七
- (22) 「綾部新五郎略伝」、『肥前史談 (肥前史談編) 第四卷』、一九三〇年
- (23) 綾部新五郎書翰、大隈重信宛、明治三年七月一日付、『大隈重信関係文書 一 あいの』、みすず書房、二〇〇四
- (24) 大槻如電 原著、佐藤栄七 増訂『日本洋学編年史』、錦正社、一九六五
- (25) Geneezame leerwijs, voor degenen, die de Engelsche taal beginnen te leeren : het Engelsch naar den bereyden Walker, en het Nederduitsch naar de heeren Weiland en Siegenbeek : negende en veel verbeterde uitgave door H.L. Schuld, 1854, Roelof van der Pijl
- (26) Familiar Method for those who begin to learn the English language. Preface by Hori Tatsnoskay, 蕃書調所刊、一八六〇
- (27) 安政三年に発足した蕃書調所は文久二年 (西暦一八六二) 五月に洋書調所と改称した。そして翌年九月にさらに開成所と改称した。
- (28) 桂川甫周編『和蘭字彙』 安政二～五年 (西暦一八五五～一八五八)
- (29) 三好彰『英和对訳袖珍辞書』における英語翻訳の考察、『英学史研究』第四二号、二〇〇九
- (30) 倉橋剛著『幕末教育史の研究 一』、吉川弘文館、一九八三

(洋学史研究会会員)